

女より



で

弱い俺



# 目次

|                    |   |
|--------------------|---|
| 妹に軽いと言われ持ち上げられた    |   |
| 目覚め . . . . .      | 3 |
| 妹にボコられる俺 . . . . . | 8 |



妹に軽いと言われ持ち上げられた



## 目覚め

ある夏の朝

高校生の俺は家に引きこもっていた。  
夏休みをインドア派の俺は楽しんでいるのだ。

名前は `ゆう`、  
歳は 17 で高 3。  
身長は 164cm、体重が 55kg 前後。  
ちなみに身長はとっくに止まった。  
男にしては低身長なのを少し気にしている。  
身長的事があり出来るだけ人の横に立ちたくないと思い引きこもり体質になった...  
というのも理由の一つだが単にゲームや漫画が好きただけだ。

そんな俺の引きこもりが続いたのは 2 週間ほど。  
アウトドア派の友人から遊びの誘いが来た...  
来てしまった.....  
友人が苦手な訳でも遊ぶのが嫌いな訳でもない。  
ただ面倒なのが正直な気持ち。  
適当に理由をつけ既に何度か断っている。  
だがここは後々気不味くなるのも嫌なのでそろそろ付き合っておくとする.....

「腰いてえ...」

友人と遊んでからの帰り道、俺はそんな独り言を呟きながら自転車を漕ぐ。  
時刻は 18 時半を過ぎた頃。  
俺はラウンドワンで約半日体を動かし、死にそうだった。  
友人は運動部で部活が休みにも関わらず、わざわざスポーツをしにいった。  
元気すぎるだろ運動部。  
俺も運動は別に嫌いではない。  
中学まで俺はサッカー部だった。  
だがしんどいので高校では帰宅部になった。  
体を動かすのは元は好きで、動かさないとウズウズしていた時期もある。

だがゲーム三昧の日々を過ごしているうちにそんなウズウズは消え去った。

そんな現在引きこもってる奴がいきなりバリバリに体を動かす。

体が平気な訳がない。

\* スタミナ切れも激しく自転車をこぐのも必死。

というか想像以上に体力が無く軽くショックだ。

「ただいま……」

やっと帰宅した俺はダルげな声でそう言った。

「おかえりー」

妹が返事をする。

そう、俺には中2の妹が居る。

名前は、さや、

身長は155cm前後。体重は知らないがどこにでもいる中2の女子だ。

ちなみに妹は部活でバレーをしている。

仲は昔から良い方。

両親は共働きでまだ帰ってないようだ。

「クソ疲れたわ」

俺はダルい体を引きずりリビングに入りながらそう呟く。

「なにしとったん？」

妹がソファーに寝転んだ状態で聞いてくる。

妹は部活だったのか体操服に裸足だ。

「ラウワン行ってた。もう一生行かんわ」

俺はそんな一生の宣言を妹にする。

「ゲームばっかして運動しなさすぎやからやろ」

呆れた顔で妹がそう言うてくる。

「体ダルい。腰痛すぎ」

腰をポンポン叩きながら俺はそう呟き椅子に座った。

「もろすぎ」

妹が小馬鹿にした様な半笑いの顔で言うてくる。

「マジで腰痛い」

俺はそう言いながら上半身を捻り腰をボキボキと鳴らす。

そんな俺を見て妹が立ち上がりこちらに来る。

そして俺に背中を向け…

「はい」

妹がそう声を出す。



俺は妹が何をしたいのか理解し立ち上がる。  
そして妹と背中合わせの状態になり腕を組んだ。  
妹は腰を伸ばすストレッチをしてくれるみたいだ。

「いくでー」

妹がそう言いながらゆっくりとお辞儀をする。  
すると俺の足は地面から浮き上がり、いとも簡単に持ち上げられた。

「ああー気持ちはいい」

俺はそう呟く。

ダルい体が修復されていく。そして少し鼓動が早くなる。

「かっる！」

妹が最初に発した言葉はそれだった。

そして笑いながら

「モヤシやん。友達より多分軽いで。運動せんから筋肉無いんや」

俺は妹にそう言われて何故か恥ずかしいのと同時にドキドキしていた。

そしてストレッチ以外の気持ちよさも感じている気がする……

鼓動が更に早くなり頭がぼんやりしてくる。

「55kg やけど」

俺は謎の感情を抑え妹にそう返す。

「軽いわ。部活でもっと重い子とストレッチするし。お兄ちゃん身長低いしな」

俺はその言葉で更に…

ヤバい、俺はこんな妹の屈辱的な言葉で間違いなく興奮している。

してしまっている！

こんな罵倒で興奮する奴だったのか俺は…

「身長はもうしょうがないやろ」

俺は興奮を妹に悟られないようどうにか返事をする。

「コレやったらちょっとは身長伸びるんじゃない？」

「伸びたら嬉しいな」

そんな悲しい会話をする。

「いや本当に軽い。スクワット出来るもん」

妹がそう言って軽くスクワットを始めた。

俺は興奮状態が MAX になっていた。

分かった。コレは罵倒で興奮してるのではない。いや罵倒でも少しした。

だが本当に興奮した理由は持ち上げられたからだ。

俺は持ち上げられるのが好きなんだと完璧に理解した。

スクワットをされて興奮状態がもう本当にヤバい

思えば昔から男友達にすらおんぶされたりするのが好きだった。  
だが女性にされたのは物心付いてからは初めてだ。妹だが。  
コレは性的な興奮だ。間違いない。  
妹相手だが間違いない。

「凄いな笑」

俺は興奮も混じった笑い声でどうにかそう返す  
男の俺を背負い何回も何回もスクワットしている。  
息も切らさずにだ。

「バレーしとるし筋肉ある方。ほいっ」

しばらく妹にスクワットをされ降ろされる。

「気持ちよかったわー」

2つの意味で。

体が嘘のようによみがえり軽くなった。

「お前も結構ガリやん」

妹の筋肉あるという発言にツッコみながら妹を見る.....

「ガリなら嬉しいけど。。でも男がガリはちょっとw」

妹をよく見てみると、筋肉が全体にバランスよくありスリムだがガリではない。

まさにスポーツ女子といった感じの体型だった。

あまり妹をしっかりと見たことはなく、今気付いた。

バレーを始める前の妹のイメージでガリと言ったが。

「身長から考えて俺は別にガリって程ではないわ」

「引き籠もるから身長止まったんやろ」

それはあるかもしれない...

そして俺はひらめいた。

ストレッチを利用してまた持ち上げてもらおう!!!

「このストレッチしてたらちょっとは身長伸びるやろ。また今度してくれ」

俺はさり気なくそう言う。かなりドキドキしたが勇気を出した。

まるで告白の様に。断られたらショックだなと恐れながら...!

「別に良いけど~重くないし」

俺は心の中で喜びの雄叫びをあげた。

そしてコレが俺のリフトフェチへの目覚めだった。

## 妹にボコられる俺

俺が目覚めてから数日。

あの日から何回か妹とストレッチをした。  
する度に軽いと言いながら笑う妹。  
最近は上下左右に兄を振り回して遊んでいる。  
ご褒美だ。

すでに日課となっていたストレッチが終わった後、妹が言ってきた。  
「お兄ちゃんおんぶさせて」  
「なんで」  
当然の返事。  
いきなり OK したらまるで俺が早く乗りたいみたいじゃないか。  
早く乗りたい。  
「とくに理由はないけど」  
妹はそう言って微笑んだ。  
「まあええけど」  
しゃあああああああああああ！  
俺は『乗ってあげても良いけど』みたいな態度で OK を出す。  
あくまでリフトフェチは内緒だからな。  
知られるのは恥ずかしい。

俺と妹は布団の敷かれた寝室に移動する。

そして俺は妹の両肩掴んで  
「いくぞ」  
飛び乗ろうと...  
「あっ待って。飛び乗らんとって。私が上げるから」  
「OK」  
早とちったがあくまで紳士な返答だ。

今度は妹の両肩に俺の両脇をセットする。  
そして妹が俺の両腕を掴んだ。

いよいよおんぶだ！

いつもストレッチで持ち上げられてるが持ち上げ方が違うだけでまた興奮も変わる。

高校生にもなって妹だが中学生の女子におんぶされる...

今の妹の格好は体操服に裸足。

コスプレじゃなくリアルだがコレもまた興奮する。

妹が俺の両腕を掴んだまま少し膝を曲げてしゃがみ、いっきに立ち上がる。

その動作で俺の体は...

「背負い投げ！！」

「うわあああっ」

投げられていた。

いや何をする！

「どう？ 私の背負い投げは！」

妹はイタズラが成功した小学生みたいな笑顔で言ってきた。

「えっちょっ何...」

俺はそれどころじゃなかった。

ちょっと脳の整理が追い付かない。

視界がグルンとなったかと思えば寝転んでいるのだ。

投げられたのは分かるんだが...

屈辱すぎる...

妹に喧嘩で負けたみたいな悔しさやダサさ.....

そんな感情でいっぱいばいばいで...

ビックリした恐怖なのか体の震えが止まらない

「綺麗に飛びすぎ！ 体育で習ったからやってみた」

「体の震えが止まらんやけど」

「ごめんごめん！ 柔道のテスト前やからお兄ちゃん軽いし練習で投げてみた」

というか投げるために寝室に移動したのか！

屈辱すぎる...

ヤバい... 恥ずい。

でも.....

興奮していた。

俺はリフトフェチだ。

リフト様相が少しでもあれば興奮するみたいだ。

俺は妹に背負われて投げられたのだ。

「なんでいきなり投げるねん...」

「サプライズやって！」

なんのだ。

と言いたい所だが興奮している俺が居る以上最高のサプライズだぜ！  
でもおんぶもされたかったな。

「もう一回投げさして」

「痛くないしええけど」

布団の上なのでダメージはない。

男として、兄として、嬉しいのは本当だが屈辱で精神的なダメージがデカイ。

「おらあ！」

不思議な感覚だ。

さっきまで立っていたのに気付けば寝ている。

人はこんな簡単に飛ぶのか。

女性に、それも妹に投げられる時が来るとは思わなかったありがとうございます。

最初はおんぶと見せ掛けてだったので両腕を掴んで投げられた。

両腕を掴まれたら受け身が取れないじゃないか...

布団の上なのでダメージはないしそもそも受け身を出来ないが。

今は片腕を掴んで投げられた。一本背負い投げだ。

「上手くない？」

「分からんわ」

俺は投げられるのが怖くて柔道の授業は全て休んできたのだ。

なので人生で初めて投げられた。しかも妹に。

「俺も投げさせて」

「良いで」

俺も投げてみたくなった。

柔道の知識なんてほぼないが一本背負い投げくらい誰でも見た事あるだろう。

俺は妹の右腕を両腕で掴み背負い込む。

そして...

「おらあ！」

「下手やん」

投げれなかった。

妹をおんぶした状態でくっ付いたままだ。

「見本見せてあげるわ！」

妹は明らかに投げたいだけの顔で言ってきた。

俺はサボっていたが妹は柔道の授業で投げ方を知っている。

教わろうか。

「まずこうする」

「うん」

妹が俺の右腕を両腕で掴み自分の肩にセットする。

「そんでこうする」

「うん」

そして軽く膝を折り自分の腰を俺の股下に通し、立った。

その動作で俺は現在おんぶされてる状態だ。

「そして...！」

「あー待って待って！」

いきなり投げる動作になった妹を全力で止める。

投げられるのも興奮するが、怖いのも事実なのだ。

「なに？」

「ちょい怖い」

「ゆっくりするわ」

そんな会話を妹に乗ったままする。

「こんな状態から出来るん？ 勢いでやるんじゃないん？」

そう。おんぶされてる状態からだと勢いが無い分純粋に力で投げる事になるはずだ。

「まあ大丈夫。重くないし」

そう言って軽く上下に揺らす妹。

まあ良いか。というかこのおんぶ状態も心地良い。

「じゃあゆっくりな」

「分かったって。まあこうやって...」

そう言って妹はゆっくり...

「おらああ！」

「うわああああ！」

ゆっくりじゃない！

「投げるんや。分かった？」

「分かるか！」

妹はまたイタズラが成功した小学生みたいな笑顔で聞いてきた。

「自分の腰を相手の股下に入れて思いっきり上げながら掴んだ相手の腕を、自分の股下に通すんや」

「ちゃんと説明出来るんかい」

妹のその通りにやってみる。

見事成功した！

「ぎこちないけど」

うるさい。

「もっかい投げさして。投げられて終わりは何か嫌やし」  
負けず嫌いなのかなんなのか。  
「せっかくやから動画撮ろう！」  
妹はそう言って自分のスマホをセットする。  
「撮るのは良いけど人に見せるなよ」  
「なんで？」  
「投げられてるの見られるのは恥ずかしいやろ」  
「分かった分かった」

第三者に持ち上げられたりしてるのを見られるのは恥ずかしい。  
男としてのプライドが女性に持ち上げられるのはだらしがないと言っている。  
見られるも興奮するという上級者ではまだない。  
俺はリフトフェチという特殊性癖。セックスには興味がない。  
俺にとってはセックスとおんぶは一緒なのだ。  
具体的には違うがとにかく人前で見られるのは恥ずかしい。

なので両親が居ない時にいつもストレッチをしている。

「いくで！」  
「おう」  
まるで空を飛んでるみたいに投げ飛ばされる。  
「もっかい！」  
「はいはい」  
立ち上がった瞬間投げられた。  
妹は運動神経は良いので投げるのがだんだん上手くなっている。  
妹が手を貸してくれて立ち上がり...

「うおおお」  
もう前置きを言わない妹に急に投げ飛ばされた。  
そしてまた立とうとするが、立てなかった。  
妹が立てないようにしたからだ。  
「ちょっお前！」  
「抜けてみ！」  
そう。妹に寝技を喰らっていた。

えっガチで抜けない。立てない。  
「ウゼえ！」  
「えへへ」  
妹は笑いながらも寝技を緩めはしない。  
いやマジで立てれん...



屈辱すぎるって！

投げられるのも屈辱だがリフト様相のない寝技はマジで屈辱しかない…

コイツこんな力強かったのか！？

びくともしない。

仕方ないので俺はタップした。

「降参…」

「一本！」

妹は自分で言った。

不意打ちとは言え、投げ飛ばされて寝技決められるとか…

兄としての尊厳が…

「動画見てみよ～」

そこには勿論、何度も投げられて最終的に寝技を決められ青い顔をしている俺の姿がガチで悔しい…

「めっちゃ綺麗に飛んでない！？」

嬉しそうだな。

「頭痛いわ」

「なんで？」

「何回も投げられたからや！」

「ごめんごめんって！」

知っていて聞いたな。

そして反省は一切してないこの笑顔。

「寝よ」

俺は投げられて寝技を決められていた体制をそのままに寝る事に。

「ここお母さんらの部屋やからダメやで」

ここは両親の寝室だ。

俺の部屋は2階。

「また後で移動するわ」

「布団がぐちゃぐちゃになったから直さなダメやし部屋行って」

「……」

「……」

無視して寝てると妹が無言で近付いてくる。

そして俺の両脇に自分の腕を通す。羽交い締めだ。

羽交い締めされた俺は妹に引きずられる。

「ちょっと立って！」

完全に力を抜いて、されるがままだった俺に妹が突っ込んだ。

仕方ないので立つか。

立とうとすると妹が俺のお腹をぎゅっと両腕でしっかり固定して抱っこしてきた。

「えっ」

「おらああああ」

「うわあああちょおお……！」

いきなり抱っこされたかと思うとそのままぐるぐると振り回された。

そしてまた布団に放り投げられた。

興奮する間もなく吐きそうになった…

「ちょっと吐くぞマジで……」

「立たんから運んだろうと思ったのに」

「立とうとしてただろ…」

ヤバい。乗り物酔いみたいだ。

それに加えてグルグルバットをやらされた気分…

「疲れた」

妹もあれだけ俺を投げ振り回したので流石に疲れて今は足を伸ばして座っている。

そんな時間が1分程。

「はい！ 退いて。布団直すから」

もう体力回復したのか。

「ゲロ出そう」

「肩貸すから部屋行って」

そう言って妹が俺に肩を貸す。

どうせなら振り回さずに普通に抱っこして連れて行ってくれよ。

わざと力を抜いて歩いてみると…

「モヤシ体力やなあ」

「あんだけ振り回すからだろ」

「おんぶした方が早いわ。」

「頼むわ！」

ノリでもう普通に乗る事にした。

両脇を妹の肩にセットする。

「投げるなよ」

「ここでは投げんわ！」

妹が膝を折り俺の股下に腰を入れそのまま立ち、持ち上げながらそう言った。

寝室を出て今はフローリングの廊下。

こんな所で投げられたら流石にしばらく立てなくなりそうだ。

俺はリフトフェチに目覚めて色んな動画を見まくった。

そこでおんぶが軽く感じる方法というのを見たのでそれを妹に教えてやる。

普通におんぶした状態。俺の両足を妹の両腕が支えている。

その両腕を支えている足の下から自分のお腹辺りに持ってきて、乗っている人の腕を X  
で掴む。

ただそれだけ。

重心が固定され、軽く感じるらしい。

「えっ軽！ 超軽い！ ただのリュックサックみたい！」

効果絶大だった。

「そんな？」

「うん。元々重くはないけど全然違う。ジャンプも出来る」

そう言って軽くジャンプする妹。

一応俺よりチビで体重も軽くて筋力もないはずなんだが...

階段手前まで小走りで走る。

転けたらヤバいと思ったが妹は裸足なので大丈夫だろう。

「階段やぞ」

「行くわ」

何かと負けず嫌いな妹は何としてでも階段をクリアしたいらしい。

流石に階段はキツイと思うので降りる予定だったがまあ良いか。

結果オーライだ。

妹が一段登る。二段。三段。

余裕だった。

「このおんぶの仕方楽やわ。お兄ちゃんより軽い友達とやったおんぶより楽やもん」

妹がドンドン階段を登る。

登るたびに妹の太ももに俺の足が当たるがめっちゃ硬い。

コイツ筋肉パンパンじゃないか。

呆気なく上まで着いた。

そして俺の部屋のドアを開け、そこにゆっくり

「おらぁ！」

「ちょおおお」

ではなく投げられた。

また背負い投げを食らった。

来ると思っていたが抵抗しきれなかった。

「吐いたらどうすんねん」

「そう簡単に吐かん吐かん」

「じゃっ」と言って妹は部屋から出て行った。

俺は投げられたそのままの体制で寝る。

今日の出来事はヤバい。兄として舐められそうだが最高すぎた。

俺は妹から送られてきた動画と記憶を大切に、しばらく最高の毎日の夜を過ごした。



---

女より非力で弱い俺

---

著 あらぼ

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---